水族館へ行こう！

京都大学白浜水族館

35

山本 泰司

ホソジュズモ

△ 驚異的な繁殖力をみせるホソジュズモ（水槽番号402）

旺盛な生命力を持つ緑藻

ホソジュズモはアオサやアオノリと同じ緑藻の仲間で、枝分かれのない糸状をしている。糸状体をよく見ると円柱形の細胞（直径0・3～0・5ミリ、長さ0・3～0・7ミリ）が一列に並んでいるのが分かる。

成長期には、1個1個の細胞が分裂と成長を繰り返し、全体的にぐんぐん伸びて長さ1メートルを超すほどになる。体はかなり硬い。海岸清掃などでホソジュズモの絡み合った固まりを、緑色の釣り糸と間違え、プラスチックごみとして扱ったという笑い話もあるほどだ。

白浜水族館では「藻場の水槽」でホソジュズモを展示しているが、15年ほど前に収容して以来、一度も補充していない。多くの海藻類が水槽での長期栽培が難しいことを考えると、ホソジュズモはとんでもなく楽な海藻なのだ。毎年、初冬から梅雨ごろまで成長し、その後は枯れて、根元の部分だけを残して夏～秋を乗り切っている。

水槽の中に大発生した小形のイソギンチャクを駆除するために、これまで何度も、水槽に淡水を数日間張ったことがあったが、それでも死滅しなかった強者だ。

生活史が解明されている近縁種では、配偶子や胞子による生殖や、単為発生、栄養繁殖など、さまざまな繁殖方法をとることから、ホソジュズモも同じような方法を駆使しながら水槽内で生き続けているのだろう。

1980年代前半、田辺湾で富栄養化が進み、湾奥でホソジュズモが大繁殖したことがあった。浜辺に大量に打ち上がったり、漁船のスクリューに巻き付いたりして世間を騒がせた。現在の田辺湾は、ずっときれいになっており、ごく小さな固まりが時々見られるくらいに減っている。

大繁殖による被害が取りざたされる一方、最近では、カキの養殖棚に繁茂した固まりを回収して紙の原料にしたり、海辺に打ち上がったものを稲作の肥料にしたり、エビ養殖池に繁茂させて水質浄化に役立たせたりなど、積極的な利用が注目されている。

（京都大学技術職員）